

教育学部英語教育専修における英語音声学についての 学習内容の検討および音声と文法の接点に関する考察*

An Examination of the Contents of English Phonetics Courses for the English Teacher-training Course of the Department of Education: Interface of English Phonetics and Grammar

本 間 伸 輔
Shinsuke HOMMA

1. はじめに

近年の日本の英語教育では、文部科学省による「英語の授業は英語で行うことを基本とする」といった方針にも見られるように、スピーキングとリスニングの能力の育成の比重がますます高まっている。つまり、英語の授業において口語英語が扱われる割合が高まっていると言える。さらに、中学校・高等学校教員養成課程向けの「外国語（英語）コア・カリキュラム」の「英語科に関する専門的事項」では、英語学の領域での学習事項として「英語の音声の仕組み」が、「英文法」と「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」と並んで3つの柱のうちの1つとして位置付けられている。

本稿においては、近年の口語英語をより一層重視した英語教育に対応した教員養成に資することを目的とし、さらに上記の「英語の音声の仕組み」に関する学習を行う科目として、2019年開始の新教育課程において開講される「英語教育と音声学Ⅰ」および「英語教育と音声学Ⅱ」のシラバスを検討することを目的とする。以下では、第2節において「英語教育と音声学Ⅰ」および「英語教育と音声学Ⅱ」のシラバス内容を概観し、第3節では、同科目における学習内容のうち、文法との接点をもつ音声現象を取り上げ、解説する。

2. 「英語教育と音声学Ⅰ」および「英語教育と音声学Ⅱ」のシラバス

このセクションでは、「英語教育と音声学Ⅰ」および「英語教育と音声学Ⅱ」のそれぞれにおける学習内容について検討する。

2.1 科目のねらい

「英語教育と音声学Ⅰ」および「英語教育と音声学Ⅱ」は、上述のように教育学部学校教員養成課程の英語教育専修の学生が履修する英語学領域の専門科目として開講し、1年次ないしは2年次での履修を予定している。英語教育専修に入学する学生は、他の専修や他の学部の学生と同様に、大学入学以前には英語音声学についての体系的な学習は行っていない。中学校から高等学校における英語学習の過程において、発音の仕方や単語の強勢など英語の音声に関する学習はしてきているものの、それは自らの英語運用能力を伸張させるための学習の一環として行ったものである。大学の教員養成課程における英語学領域の専門的学習では、英語の音声に関わる仕組みを学問的な考察対象とし、言語学的な理解を目指すことによって、英語の音声面

の仕組みや、さらに母語である日本語の音声との仕組みの違いについて体系的に理解することが求められる。「英語教育と音声学Ⅰ」および「英語教育と音声学Ⅱ」に先行して履修する予定の「英語学概説」において、英語の音声に関わる学習を2回に渡って行う計画であるが、極めて限られた分量であるため、英語の音声に関する学習に特化した科目を用意する必要がある。

なお、英語学において英語の音声を扱う研究分野としては、音声学と音韻論の2種類がある。前者は音声の調音の仕組みなど、「音声現象を客観的に調べる学問（窪蘭(1998)）」であり、後者は各音素の個別言語の中での働きなど「音声現象を言語の体系の中で捉えようとする学問（同上）」である。科目名の「英語教育と音声学Ⅰ」と「英語教育と音声学Ⅱ」では「音声学」のみを謳っているが、英語音韻論の分野からも、単語の強勢の仕組みやイントネーションと意味解釈の関連など有益と思える知見を取り入れる。

2.2 シラバス内容の検討

2.2.1 「英語教育と音声学Ⅰ」

「英語教育と音声学Ⅰ」では以下の内容を予定している。

- 第1回：オリエンテーション、母音の発音(1)：短母音の種類
- 第2回：母音の発音(2)：長母音の種類
- 第3回：母音の発音(3)：二重母音、三重母音
- 第4回：母音の発音(4)：日本語の母音との違い
- 第5回：子音の発音(1)：調音点、破裂音
- 第6回：子音の発音(2)：摩擦音、破擦音
- 第7回：子音の発音(3)：流音、鼻音
- 第8回：子音の発音(4)：半母音、日本語の子音との違い
- 第9回：アメリカ英語とイギリス英語との違い
- 第10回：音節(1)：音節の仕組み
- 第11回：音節(2)：日本語と英語の音節構造の違い
- 第12回：単語の強勢(1)：第1強勢と第2強勢
- 第13回：単語の強勢(2)：強勢付与の仕組み
- 第14回：単語の強勢(3)：複合語の強勢、強勢の移動
- 第15回：まとめ

第1回から第9回までは、英語の個々の音素の調音方法および英語の音素の体系を学ぶ。最初の4回を母音、次の4回を子音の学習に充てる。英語の個々の音素については、「英語学概説」でも学習することになっているが、本科目では演習を取り入れ、発音に関する知識のみならず、発音の技能も身につけさせたい。

第9回ではアメリカ英語とイギリス英語の違いについて触れる。アメリカ英語とイギリス英語で調音方法が異なっていたり、同一の単語でも異なる音素が使われることもあるため、この点を理解するための学習にも時間を割く。例として、old, mode などにおける二重母音 [ou] の違いや、can't や half などの語における [æ] (アメリカ英語) と [ɒ] (イギリス英語) の違いなどを取り上げる。

また、第4回と第8回に示したように日本語の個々の音素と比較し相違点を理解する。英語の音素には、日本語にはない、あるいは日本語と似ているが調音方法が異なるものが大半をしめるからである。例えば、[æ] や [θ] は日本語にはない音素であるし、[i] は日本語の「イ」の音とほぼ同じ音のように聞こえるが、[i] は「イ」よりも若干「エ」に近い音とされる。

第10回と第11回では、音節の仕組み、音素の配列のしかたについて学習する。この点に関しても英語と日本語との間に顕著な違いがある。音節は基本的に母音を中心として構成されるが、英語の音節は母音の前後両側に子音が配列されうののに対して、日本語の音節では、子音が母音の前にしか生起しない。それゆえ、英語では単語が子音で終わることが可能であるのに対して、日本語の単語は「ん」で終わる場合を除くと母音で終わるのが原則である。また、英語では子音が連続しうののに対して、日本語では子音が連続しない。このため、発音の演習においては、連続する子音の間に母音を挿入しないことに注意を向けさせたい。

第12回から第14回までは、単語の強勢について学ぶ。まずは強勢の音声的性質をよく理解するところか

ら始めたい。日本語では、強勢ではなく音の高低（ピッチ）が重要な働きをしているため、この違いを熟知することは重要である。さらに、単語の強勢付与について基本的な規則を学んでおくことは有益である。英単語の正しい強勢の位置を覚えるのは、英語学習者を悩ます事項であるが、単語の強勢の位置が実は一定の規則によって決定されていることを知っておくのは、効果的な発音指導につながる可能性があるだろう。さらに複合語の強勢や強勢の移動について学習する。

2.2.2 「英語教育と音声学Ⅱ」

「英語教育と音声学Ⅱ」では、以下の授業内容を予定している。

- 第1回：文の強勢(1)：伝達の焦点、弱化される語
- 第2回：文の強勢(2)：関心の焦点、文末強勢
- 第3回：文の強勢(3)：強勢の累積、情報量希薄な語への強勢付加
- 第4回：単音に起こる変化(1)：脱落
- 第5回：単音に起こる変化(2)：同化
- 第6回：単音に起こる変化(3)：合着
- 第7回：単音に起こる変化(4)：弱形と強形
- 第8回：イントネーション(1)：イントネーションとは
- 第9回：イントネーション(2)：上昇調と下降調
- 第10回：イントネーション(3)：下降上昇調
- 第11回：イントネーション(4)：上昇下降調、平板調
- 第12回：音声と文字(1)：綴り字と発音の規則性
- 第13回：音声と文字(2)：綴り字と発音の不規則性
- 第14回：音声と文字(3)：黙字、同音異義語
- 第15回：まとめ

「英語教育と音声学Ⅰ」のシラバスは単語レベルでの音声現象を中心に編成しているが、「英語教育と音声学Ⅱ」では、文レベルにおける音声現象を中心に考察する。

第1回から第3回にかけては、文の強勢について学習する。個々の単語には強勢があるが、すべてが等しい強さで発音されるのではなく、相対的に強い・弱い差が生じる。文中で最も強い強勢を受ける部分を焦点と呼ぶが、様々な種類の焦点について、それらが持つ意味を中心に学習を進める。A: What did you see? B: I saw a snake.のように、疑問文の答えとなる部分が強く読まれることはよく知られているが、この他の焦点の種類を考察すると共に、学習者が自らの発話で意味に応じた適切な強勢の置き方ができるよう演習も取り入れる。

第4回から第7回においては、文の中で単語の音に起こる変化について学習する。文の中で単語が隣接する場合、2つの後があたかも1語であるかのように発音されたり、あるいは隣接する音素どうしが影響し合って、元の音素が変化することがある。動詞 like に代名詞 it が後続すると、[laɪkɪt] のように1語のように発音されるし、Did you go there? の Did you の部分は、もとの [did] と [ju:] が組み合わせさり、[dɪʃu:] に変化する。また、単語が隣接する際、もともとあった音素が消滅することがある。例えば、and は [ænd] という音を持っているが、John and Mary などの例では、[æ] のあいまい母音 [ə] への変化と共に、[d] の脱落が起こって [ən] という音となる。

第8回から第11回においては、文のイントネーションについて学習する。文のイントネーションも、文強勢と同様、英語では文法や意味解釈と密接な関係がある。文の意味解釈によって特定のイントネーションのパターンが選択されるため、イントネーションの種類についての知識と特定のイントネーションを実際の発話で使えるようになることは英語学習者の口語英語の表現力を豊かにするはずである。このため、それぞれのイントネーションのパターンについての知識のみならず、実際に発話で使う技能が身につくように演習も行いう予定である。

第12回から第14回にかけては、英語の音声と綴り字との関係について学習する。英語の単語の発音と綴り字は決して恣意的な関係ではなく、ある程度の規則性がある。pin は [pin] と発音され、pine は [paɪn] とい

う発音である。すなわち綴り字のiの部分の発音が異なっているが、これは後続する子音字にさらにeが後続すれば当該の母音字は長音になり、そうでなければ短音になるという原則に基づいている(成田(2009))。この規則は、mat [mæt]とmate [meɪt], cut [kʌt]とcute [kju:t]に違いにも見られる。このような知識は発音指導をする際に有効であろう。

3. 英語の音声現象と文法との節点

「英語教育と音声学Ⅰ」と「英語教育と音声学Ⅱ」は、英語の音声面の現象を考察し、また音声に関わる技能を習得することを目的としているが、言語における音声は、それ自体で独立して存在しているわけではない。そもそも言語とは、口語における音声または書き言葉における文字、文や語の構造、意味解釈の仕組みといった要因から構成される複合的なシステムである。第2節の「英語教育と音声学Ⅱ」のシラバス内容の検討でも若干触れたように、特に文レベルの音声現象である文強勢やイントネーションは、文の構造や意味解釈と密接な関係を持つ。この節では、文の構造や意味解釈といった、言語の他の種類の仕組みと密接な関連をもつ音声現象をいくつか取り上げてみたい。

3.1 助動詞の強勢

英語における助動詞や冠詞、接続詞などの機能語には、発音のされ方により弱形と強形の2種類がある。例として助動詞は以下の弱形と強形を持つ。¹

(1)	助動詞	弱形	強形
	am	[(ə)m]	[æm]
	are	[ə(r)]	[ɑ:(r)]
	be	[bi]	[bi:]
	can	[k(ə)n]	[kæn]
	could	[kəd]	[kʊd]
	do	[d(ə)]	[du:]
	does	[dəz]	[dʌz]
	had	[(h)əd]	[hæd]
	has	[(h)əz]	[hæz]
	have	[(h)əv]	[hæv]
	is	[z, s]	[ɪz]
	must	[m(ə)s(t)]	[mʌst]
	shall	[ʃ(ə)l]	[ʃæl]
	should	[ʃ(ə)d]	[ʃʊd]
	was	[w(ə)z]	[wɒz]
	were	[wə(r)]	[wɜ:(r)]
	would	[wəd, əd]	[wʊd]
	will	[(ə)l]	[wɪl]

(Swan (1995: 617))

この2つの発音形式は自由に選ばれるわけではない。強形が用いられるのは、文の中でその語に強勢が与えられる場合である。そうでなければ弱形が用いられる。それでは、このような助動詞に強勢が与えられる場合はどのような場合であるかという問題になるが、意味的な要因と統語構造的な要因の2種類を挙げることができる(岡崎(2001))。以下では(1)で挙げたbe, have, 法助動詞に強勢が与えられ、それゆえ強形が用いられる場合を考察していく。

まずこれらの語は、特に理由がなければ弱形で発音されるのが普通である。

(2) a. He can [kən] speak French.

b. I have [həv] seen him.

(安井(1996))

これらの語に強勢が付与される意味的な要因の一つとして、意味的な対比が挙げられる。²

- (3) a. A: Why haven't you had a bath?
 B: I HAVE had a bath.
 b. A: Look for your shoes.
 B: I AM looking for them.
 c. She promised so she MUST take him with her. (Quirk et al. (1985))

(3)の強形の助動詞 have, am, must を含む文はすべて肯定と否定の対比が起こっていると解釈される。例えば (3a)の I HAVE had a bath. はAの「なぜまだ風呂に入っていないのか。」という否定の内容を前提とした問いに対して「否定ではなく肯定である」ことを強調している応答となっている。同様に、(3b)では、Aの Look for your shoes. の前提となっている「あなたは靴を探していない。」という内容に対して「探していないのではなく探しているのだ。」というように、やはり否定に対して肯定であることを強調している。

(3)では「否定ではなく肯定である」という対比が起こっているが、逆に「肯定ではなく否定である」ことを伝える場合も同様である。

- (4) So you HAVEN't lost it. [You thought you had]

(4)は助動詞 have の強形が用いられている。ここでは、「あなたはそれをなくしたと思っていましたが、なくしてはいないのですね。」というように「肯定ではなく否定である」ことが伝えられている。つまり、肯定に対して否定が対比させられているので、強勢が与えられ強形が用いられている。

さらに、肯否疑問文に対する省略的な応答形式においても強形が用いられる。

- (5) a. A: Have you seen my books?
 B: No, I HAVEN't.
 b. A: Would you like black coffee?
 B: Yes, I WOULD.
 c. A: Does this bell work?
 B: Yes, it DOES. (Quirk et al. (1985))

この強形の生起についても、(3), (4)での強形の生起と同じ理由によると言える。すなわち、肯否疑問文に対する応答は、まさに肯定と否定が対比される場合であるからである(水光(1985), 岡崎(2001))。肯否疑問文の応答は、肯定と否定のうちどちらであるかを選択するものである。肯定を選択すれば、それは否定と対比することになるし、反対に否定を選択すれば肯定との対比が起こることになる。

助動詞は現在、過去、未来といった「時」を表す機能もあるため、時に関する対比が起こる場合も、助動詞に強勢が置かれ、強形が用いられる(Quirk et al. (1985))。

- (6) a. We've sold out but we WILL be getting some.
 b. It HAS been and still IS a difficult time. (Quirk et al. (1985))

(6a)では現在と未来の状況とが対比されている。「現在は売り切れの状況であるが、未来においては入荷するだろう」と言っているのである。(6b)では、現在完了形 has been と現在形 is との間に対比が起こっている。これまでの状況と現在の状況とを対比し、両方において困難な状況があると言っているのである。このように時が対比される場合も助動詞に強勢が置かれ、それゆえ強形が用いられる。

助動詞の強形が用いられるための第2の要因は統語構造的なものである。

- (7) a. Someday he'd like to be what you ARE ____ now.
 b. Mary will eat more at breakfast than Sarah WILL ____ at dinner. (Selkirk (1972))

(7)の2つの例はいずれも肯否や時に関する対比は起こっていない。これらに共通しているのは、強形の助動詞の直後が統語的な空所になっているという点である。(7a)の空所は what の移動によって生じたものである。また、(7b)の will の直後の空所は動詞句の省略によって生じたものである。つまり、助動詞の直後に統語構造的な空所が生じた場合に強形が用いられるという条件があることが分かる。

以上のように、助動詞の強形の生起が意味的・統語的な条件、つまり文法的な要因によって条件づけられていることを見たが、さらに強形の使用と文法との密接な関係を物語る現象として、「強調の do」の使用がある。一般動詞を含む肯定平叙文においては特に理由がなければ(8a)のように do は生じないが、(8b)のように do の使用が禁じられているわけではない。

- (8) a. I like sports.
b. I do like sports.

学校文法では(8b)のdoを「強調のdo」と呼んでいるが、それではいったいどのような情報が「強調」されているのだろうか。

以下のように「強調のdo」はまさに助動詞の強形が用いられる環境と同じく、肯否や時に関する対比が起こる場合に用いられる(Quirk et al. (1985))。

- (9) a. So you DID go to the concert this evening. [ie 'I thought you might, but ...]
b. But I DO think you're a good cook. [ie '... even if you imagine I don't]
c. He owns - or DID own - a Rolls Royce. (Quirk et al. (1985))

(9a)は「否定ではなく肯定である」旨が伝えられている。話し手は、聞き手がコンサートに行くかもしれないと思ってはいたが、行くか行かないかについての確信はなかったのである。そこで否定ではなく肯定であることを強調するためにdidを用いたと理解できる。(9b)は聞き手が自分が料理が上手だとは思っていないことに対して、話し手の方はそう思っている旨、つまり否定ではなく肯定であることを伝えるためにdoが用いられている。(9c)は時に関する対比が起こっている。彼のロールスロイスの所有が現在のことなのか過去のことなのかを問題としているため、現在と過去が対比させられている。このためにdidが用いられている。

一般には「強調のdo」と呼ばれていないが、一般動詞を含む肯否疑問文に対する肯定の応答においてもdoが使われるのは周知の事実である。

- (10) Do you like baseball? - Yes, I do. / No, I don't.

このdoの使用も助動詞の強形の使用と同じ条件に基づいていると考えればよい。肯否疑問文に対する応答においては、肯定と否定が対比されているために助動詞の強形が用いられることを上で見たが、(10)の応答もまさに同じ環境である。

さらに、統語的な空所の直前で助動詞の強形が用いられるのと同様に、doも統語的な空所の直前で生起する。

- (11) a. Mary read books faster than I do.
b. Did you watch the game on television? No, but my brother did.

(11a)も(11b)もdoの直後には動詞句が省略されている。

以上のように、助動詞の強形と助動詞doの生起は同じ条件に従っていることが分かる。このことから、助動詞の強形・弱形の選択は、基本的に音声的な現象ではあるが、文法的な仕組みによって支配されている現象であり、「強調のdo」を含む助動詞doの生起条件と同じ基盤をもつ文法現象であると言える。

3.2 日本語の文法と関連する音声現象 下降上昇調

英語には文末の音調が下降する下降調と文末を上げるように発音する上昇調の2種類の音調があることはよく知られている。前者の下降調は主として平叙文で用いられ、後者は肯否疑問文の読み方であるため、中学校初期段階での重要な学習事項となっている。英語にはこの他にも、下降調と上昇調を組み合わせた下降上昇調と上昇下降調といった音調がある。このうちの下降上昇調は以下のような意味を持っている。(12)を考察されたい。

- (12) You can come on SUNDAY.



(川越(2007))

この文においては、SundayのSunの部分が一番強く読まれるが直後にいったん音調が下がり、さらに文末に上昇調になる。この下降上昇調により話者は「日曜日に来ていいよ」と述べながら日曜日以外については判断を保留している(川越(2007), 今井(2007))。つまり、日曜日以外の日については、来ていいかどうかはつきり判断できないか、あるいは言外に日曜日以外には来ないで欲しいと言っているのである。³

下降上昇調の持つこの判断保留の意味は、以下の例についても当てはまる。

(13) A: Did you feed the animals?

B: I fed the CAT.



(Ladd (1978))

Bの発話では、Bは猫に食事を与えたことを述べているが、the animalsで表される集合のうちの他の動物、例えば犬には食事を与えなかったことを間接的に伝えている(Ladd (1978))。言い換えれば、(13B)の発話は、the animalsの集合のうちの猫以外の成員については判断を保留し、それによって他の成員には食事を与えなかったことを言外に伝えようとしているのである。

英語の下降上昇調が表すこの「他の成員についての判断保留」の意味は、興味深いことに日本語では形態的な方法によって表される。

(14) a. 彼は戯曲を書いた。

b. 彼は戯曲は書いた。 (Kato (1985))

(14b)では、助詞の「は」が2カ所に生起しているが、2番目の「戯曲は」の「は」は強く発音され、何らかの対比の意味があることから、「対比の「は」」と呼ばれる。⁴ Kato (1985)によれば、(14b)は次のような解釈を受ける。

(15) 焦点： 戯曲

前提： 彼は何かを書いた

断定： 彼が書いたのは戯曲だ

含意： (i) 他の形式の作品（詩、小節など）を書いたかどうかは知らない、または
(ii) 他の形式の作品は書かなかった

つまり(14b)では、彼の書いた作品が戯曲であることを主張しつつ、戯曲を含む作品の集合に言及し、他の種類の作品については判断を保留しているのである。一方(14a)は対比の「は」ではなく格助詞の「を」を伴っているが、(15)の焦点、前提、断定については同じ意味を持つことができるものの、(15)の含意の部分の意味を持つようには解釈されない。言い換えれば、「彼は何を書いたのですか」という問いに対して、(14b)は「戯曲を書いたことは知っているが、他の種類の作品については知らない」という意味で発せられるのに対して、(14a)は「他の種類の作品については知らない」といった含意を持つことができないのである。

以上の考察から、日本語の対比の「は」は英語の下降上昇調と同じく「他の成員についての判断保留」という意味を持っていることがわかる。さらにこの対比の「は」と下降上昇調の共通性は、否定文におけるそれぞれの意味からもわかる。次の英語の例を考察されたい。

(16) a. FRED doesn't write a poem in the garden.



(下降上昇調)

b. FRED doesn't write a poem in the garden.



(下降調) (Jackendoff (1972))

(16a)では、主語のFredが強く読まれ、その後いったん音調が下降し文末が上昇調で発音される。一方、(16b)でも主語が強く読まれるが、文末が下降調になる。この発音のしかたの違いにより、(16a)と(16b)はそれぞれ以下の読みになる(Jackendoff (1972), 太田(1980))。

(17) a. (16a)の場合の読み

焦点： フレッド

前提： 誰かが庭で詩を書く

断定： 庭で詩を書くのはフレッドではない。

b. (16b)の場合の読み

焦点： フレッド

前提： 誰かが庭で詩を書かない

断定： 庭で詩を書かないのはフレッドである

(16a)のように下降上昇調で読むと、Fredとnot以外の部分を除いた「誰かが庭で詩を書く」という肯定の内容が前提とされ、さらにFredが否定の対象となり、それによって「庭で詩を書くのは他の人だ」という含みが得られる。一方、(16b)の場合は、「誰かが庭で詩を書かなかった」という否定を含む内容が前提とされ、Fredが文の焦点になっているが、Fredが否定されるのではない。このように、下降上昇調で読まれる否定文では、強く読まれる要素が否定の対象になるのである。

否定の対象になるという点では、日本語の対比の「は」も同様の機能を有する。

(18) a. 彼は戯曲を書かなかった

b. 彼は戯曲は書かなかった

対比の「は」を含む(18b)は以下の解釈を受ける(Kato (1985))。

(19) 焦点： 戯曲

前提： 彼は何かを書いた

断定： 彼が書いたのは戯曲ではない

含意： 彼が書いたのは戯曲以外のものだ

(19)で示すように、(18b)が前提としているのは肯定の内容である。さらに、焦点となる「戯曲」が否定の対象となっており、戯曲以外のものを書いたという含意が得られる。この点において、否定文における対比の「は」も、英語の下降上昇調の文で強く読まれる要素と同じ機能を有していることがわかる。一方、(18a)は(19)のように解釈されず、下降調で読まれる(16b)とパラレルな解釈、つまり否定の内容が前提となる解釈を持ちうる。

(20) 焦点： 戯曲

前提： 彼は何かを書かなかった(彼が書かなかった種類の作品がある)

断定： 彼が書かなかったのは戯曲である

以上の考察によって、英語の下降上昇調は、意味解釈の点において日本語の対比の「は」と共通の機能を持つことが分かった。⁵ 換言すれば、同じ意味を表すのに英語では音声的な手段を、日本語では文法的・形態的な手段を用いていることになる。英語の下降上昇調は基本的には音声的な現象であるが、普遍文法理論の観点からは、この意味において文法との接点を持っていることが分かる。

さらにこの比較は、英語教育に関する示唆を与えてくれるようにも思われる。日本語の対比の「は」と英語で意味的に対応するのは、下降上昇調という音声的な手段ということになるが、これはすなわち対比の「は」に対応する「訳語」や「文法形式」がないということの意味する。つまりある表現は、他の言語に常に言語形式を用いて訳されるわけではなく、中には音声として「訳される」場合もあることになる。口語英語の指導に際しては、このような観点を持つことも有益であろう。

3.3 複合語の強勢

複合語とは、2語以上の単語が組み合わせさり、1つの単語になったものを指す。以下の例が複合語に該当する。⁶

(21) a. a bláckbòard (黒板) b. a gréenhouse (温室) c. the White Hòuse (ホワイトハウス)

d. chòcolate-bòx (おとぎ話のような) e. níght-time (夜間) (今井(2007))

複合語の強勢の特徴としては、(21)に示したように第1要素に第1強勢が、第2要素に第2強勢が与えられることがよく知られている。⁷ 例えば、blackboardは第1要素であるblackの強勢が第2要素のboardよりも強くなる。この複合語の特徴は、第1要素と第2要素と同じ語が句を形成する場合の強勢パターンと対比をなす。

(22) a. a blàck bóard b. a gréen hóuse c. a white hóuse (今井(2007))

(22)は複合語ではなく、いずれも「形容詞+名詞」というパターンからなる名詞句であるが、形容詞に対比強勢が置かれるなどの特別な理由がない限り、形容詞に第2強勢が、主要部の名詞に第1強勢が置かれる。

なお、複合語は(21)のように第1要素と第2要素の間にスペースがないものや、第1要素と第2要素とがハイフンで結ばれるものばかりとは限らない。第1要素と第2要素との間にスペースが入るため、見かけ上複合語に見えないものもあるが、以下の例は複合語とされる例であり、第1要素に第1強勢が置かれる。

(23) a. an English teacher (英語の先生) b. a Christmas card c. orange juice

(22)の例は、それぞれの単語が単語として独立しているが、(21)や(23)の複合語は、第1要素と第2要素が結合して1つの単語を形成している。つまり、複合語と(22)の例は構造的に異なっているのである。このことから、構造という文法的な要因が強勢という音声現象の決定要因になっていると言ってよいだろう。

4. おわりに

本稿では、平成31年度より教育学部英語教育専修向けに開講される、英語の音声に関することからを学習する2つの科目「英語教育と音声学Ⅰ」「英語教育と音声学Ⅱ」の授業内容を概観した。さらに、これらの授業内容のうち文法との接点を持つ現象を取り上げ、解説を加えた。また、英語の音声面に関する学習は音声面に目を向けるだけでは必ずしも十分ではなく、文の意味解釈や構造といった文法との関連性も合わせて理解する必要があることを指摘した。

注

* 本稿は、平成27-29年度科学研究費助成事業（基盤研究(C)、課題番号15K02593）「英語・日本語数量詞句の作用域決定を司る統語的・意味的要因に関する理論的考察」（研究代表者 本間伸輔）の助成を受けている。

¹ (1)は法助動詞の他に、be, haveおよびその活用形も含んでいる。beと完了のhaveは共に疑問文や否定文において法助動詞と同じ統語的振る舞いを示すことから、本稿では便宜上「助動詞」に含めることにする。

² 強勢を受け強形になる語を大文字で表記する。

³ Bolinger (1965, 1986), Ladd (1978)等も参照。

⁴ 文頭の要素である「彼は」の「は」は、通常は強く読まれず、また対比の意味もない。このような「は」は「主題の「は」」と呼ばれる。なお、例文中でこれら2種類の「は」を区別するために、対比の「は」を太字体で表記する。

⁵ なお、下降上昇調と対比の「は」の相違点については、Heycock (2008), 富岡(2010)等を参照。

⁶ *á*は、その母音を含む音節に第一強勢が与えられることを示し、*à*は第二強勢を示す。

⁷ 窪園(1998), 今井(2007), 川越(2007)などを参照。

引用文献

Bolinger, Dwight L. (1965) *Forms of English*, Hokuo Publishing Company, Tokyo.

Bolinger, Dwight L. (1986) *Intonation and Its Parts: Melody in Spoken English*, Stanford University Press, Stanford.

Heycock, Caroline (2008) "Japanese –*Wa*, –*Ga*, and Information Structure," in Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito eds. *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 54-83, Oxford University Press.

今井邦彦(2007) 『ファンダメンタル音声学』, ひつじ書房, 東京.

Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, MA.

Ladd, D. Robert (1978) *Intonational Meaning: Evidence from English*, Indiana University Press.

Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese (Sophia Linguistica 19)*, Sophia University, Tokyo.

窪園晴夫(1998)『音声学・音韻論』(日英語対照による英語学演習シリーズ1), くろしお出版, 東京.

川越いつえ(2007) 『英語の音声を科学する』, 大修館書店, 東京.

成田圭市(2009) 『英語の綴りと発音 「混沌」へのアプローチ』, 三恵社, 愛知.

岡崎正男(2001)「音韻論におけるインターフェイス」, 岡崎正男・小野塚裕視『文法におけるインターフェイス』, 1-101, 研究社出版, 東京.

太田朗(1980)『否定の意味』, 大修館書店, 東京.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

Selkirk, Lisa (1972) *The Phrase Phonology of English and French*, Doctoral dissertation, MIT.

水光雅則(1985)『文法と発音』, 大修館書店, 東京.

Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*, Oxford University Press.

富岡諭(2010)「発話行為と対象主題」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究』, 301-331, 開拓社, 東京.
安井稔(1996)『英文法総覧』, 開拓社, 東京.